

聖書箇所：第一サムエル記 28章 15～25節

説教題：主が告げられたとおりに

あらすじ

ある日、ペリシテ人はイスラエルに戦いを仕掛けていきます。イスラエルの王であったサウルは、あわてて主に伺おうとします。ところが何の応答もありません。追いつめられたサウルは、霊媒のところに行けば道が開けるかもしれないと考えます。

実はずっと以前に、サウルは自分の手で霊媒をイスラエルから追い出していたのです。主の命令があったからでした。でも、今はそんなことはどうでもよい。主の命令よりも自分のいのちのことが心配です。サウルは身分を隠し、変装までして、女霊媒の所に向かいました。

最初、女霊媒はサウルの申し出を聞いて尻込みします。そんなことをしたら殺されるからです。しかしサウルはすべて責任は自分が持つから、とにかくサムエルを呼び出せと半ば強引に命令します。女霊媒はサウルのことばに従い、サムエルを呼び出しました。これが先週までのあらすじです。

1 サウル：主の御声に聞き従わなかった

サムエルはサウルにこう語ります。「なぜ、私に尋ねるのか。主はあなたから去り、あなたの敵になられたのに。」主がサウルから去った理由についてはこう語ります。「あなたは主の御声に聞き従わず、燃える御怒りをもってアマレクを罰しなかったからだ。それゆえ、主はきょう、このことをあなたにされたのだ。」

このあたりの事情は、15章に詳しく描かれています。話しはモーセの時代にまでさかのぼります。イスラエル人はエジプトから脱出しました。けれども長い旅が続くうちに、次第に集団から遅れる人たちが出始めました。アマレク人はそんな弱っている者をめがけて襲いかかり、殺し、財産を奪うというひどいことをしました。

主はその事をずっと覚えておられ、サウルの時代になり、アマレク人を徹底的に罰なさいと命じます。サウルは、確かにアマレク人を剣の刃で打ちました。ところが、まるで肥った羊や牛に目がくらみ、それを持ち帰ってしまいます。サムエルはそれを見てサウルを問いただすのですが、サウルは嘘をつき、自分がやったことをごまかそうとしました。

それが「主の御声に聞き従わなかった」という事情です。そして、サムエルは最後にこう告げるのです。「主は、あなたといっしょにイスラエルをペリシテ人の手に渡される。あす、あなたも、あなたの息子たちも私といっしょになろう。そして主は、イスラエルの陣営をペリシテ人の手に渡される。」

サウルはペリシテ人の戦いに敗れて、あした死ぬ。そして息子たちも死ぬ。

私たちは、これまでサウルがどんな人物であったのかを詳しく見てきました。忠実に仕えてきたダビデに対し、理不尽な仕打ちを何度も繰り返し、そのたびにダビデは苦しい思いをしてきたのを知っています。腹も立ちま

した。ですからサウルが死ぬと聞いても、どこかで「当然だ」と言いたくなる自分がいます。そしてこれで終わりにしたくなる。

しかし聖書はそこで終わらない。続きがあります。そこにどんな意味が込められているのか、考えていきます。

2 女

(1) いのちをかけて聞き従った

女性は倒れたサウルにこう言います。「あなたのはしためは、あなたの言われたことに聞き従いました。私は自分のいのちをかけて、あなたが言われた命令に従いました。」

イスラエルでは霊媒をすることは禁止されていたので、もしそのことがわかれば殺されてしまいます。それなのにサウルは、自分が責任を持つから、霊媒の力でサムエルを呼び出せと半ば脅しました。ですから自分のいのちをかけてサウルのことばに聞き従ったというのは、本当です。

そしてこう続けます。「今度はどうか、あなたがこのはしための言うことを聞き入れてください。」

そう言うってからわざわざ家で飼っていた子牛をほふり、種なしパンまで焼いてサウルのためにもてなします。突然自分の家にイスラエルの王が尋ねてきたので、精一杯もてなした、とも思えなくもありません。しかしサウルはお忍びでやって来たのです。食事を出す義務はありません。この女性のしていることはかなり度を超しています。

(2) 今度は、あなたが聞き入れてください

なぜここまでするのでしょうか。ヒントは「聞き従う」ということばにあります。きょうのこの箇所を注意深く読んでください。

「聞き従う」ということばが三度繰り返されていることに気がつきます。

一つ目は18節にあります。「主の御声に聞き従わず、燃える御怒りをもってアマレクを罰しなかった。」聞き従わなかったのはサウル。何に聞き従わなかったのか。主の御声でした。

二つ目は21節。「あなたのはしためは、あなたの言われたことに聞き従いました。」聞き従ったのは、サウルのはしため、つまり女霊媒師です。聞き従った相手は、サウルのことば。

そして三つ目は22節。「今度はどうか、あなたがこのはしための言うことを聞き入れてください。」聞き従うのはサウル。聞き従う相手はサウルのはしため、女霊媒師。二つ目のときは、聞き従う関係が反対になっています。

サウルは過去に、主の御声に聞き従うことをせず、肥えた羊と牛を自分のものとしてしまいました。その結果、主はサウルから去り、あした死ぬことになります。言い換えれば、主の御声を聞いても、いのちをかけて聞き従うことはしなかったがために、死ぬことになります。

一方女霊媒師はその反対です。この女性はいのちをかけてサウルのことばに従い、生き延びます。生き延びた女性が、今度はサウルを励ましています。「今度はどうか、このはしための言うことを聞き入れてください。」

(3) サウルのために子牛をほふり、種なしパンを焼く

そして、わざわざ子牛をほふります。サウルが元気になるために、子牛が殺されました。動物のいのちがささげられたのです。血

が流されました。

また種なしパンも焼きます。発酵させる時間がなかったので種なしパンにしたということではありません。特別な意味が込められています。

種なしパンの起源は、イスラエルの民がエジプトを脱出するときにまでさかのぼりません。神はエジプトにわざわいを送り、エジプトの初子を打つと予告されました。そのわざわいがイスラエルに及ばないようにと、家のかもいに羊の血を塗り、その夜は種なしパンを食べるようにと命じられました。イスラエル人は、その夜に起きた神の救いの出来事を忘れないようにと、種なしパンの祭りを年に一度開き、後の子孫に伝えていくように命じられていました。

こうして見ると、サウルの罪のために子牛がほふられ、種なしパンが焼かれたようではないですか。

3 私たちの友であるイエス・キリスト

(1) ダビデはサウルのために誓っていた

いのちをかけてサウルに聞き従い、生き延びた女性が「このはしための言うことを聞き入れてください」と語りました。子牛をほふり、種なしパンを焼きました。サウルが生き延びるためにということです。でも、どうせサウルはあした戦いで死ぬことになっています。いまさら聞き従うことなど無駄なことと思うのでしょうか。

無駄なことをしているわけではありません。サムエルはなんと言ったか。17節後半。「主はあなたの手から王位をはぎ取って、あなたの友ダビデに与えられた。」

サウルにとってダビデは友人などではありません。ダビデを殺すためなら、なんでも

してきたのです。サムエルがその事を知らないはずはありません。これは皮肉なのでしょう。いいえ、そうではない。サウルが、ダビデに対してどんなにひどいことを繰り返したとしても、主は言われるのです。「ダビデはあなたの友である。」

なぜでしょう。その事情は24章21節にまでさかのぼります。ダビデがほら穴に隠れていたとき、それと知らずにサウルが入って来ました。ダビデは、「主に油そがれた方に手を下すことなど、主の前に絶対にできない」と告白し、サウルを助けます。そのことをあとで知ったサウルは、声を上げて泣き、自分が犯した罪を悔います。そしてダビデにこう願いました。「さあ、主にかけて私に誓ってくれ。私のあとの私の子孫を断たず、私の名を私の家から根絶やしにしないことを。」ダビデはどうしたか。サウルの願いを聞き入れ、サウルに誓いました。

もうすぐサウルは死に、三人の息子たちも殺されます。では、ダビデの誓いはどうなるのでしょうか。いいえ。ダビデは、自分がイスラエルの王になってからもサウルの家族を保護していきます。主が誓ってくださった事は、必ず成し遂げられるとダビデが信じていたからです。

サムエルが「あなたの友ダビデ」といった理由がこれでおわかりでしょう。女霊媒師が、しきりにサウルを励まし「あながたこのはしための言うことを聞き入れてください」と言ったのも同じ理由です。サウルは確かに死にます。しかし、主は覚えてくださっているのです。ダビデをとおして誓われた誓いは絶対に成し遂げられる。だから気落ちする必要はない。だから今この食べ物を食べて元気を出

しなさい。今聞き従ってください。

サウルの信仰は岩の上にはありません。砂の上に建てられた家のようなものでした。嵐が来るとひどい倒れ方をしました。でもだからと言って救いが取りあげられたのではない。あんな信仰であったサウルでも、主はサウルを救おうとされているのです。主は何があっても、どんな事があっても告げられたとおりのことをしていかれます。

驚きますか。サウルのような者が救われるのなら、わざわざクリスチャンになる意味はあるのか。疑問に思うでしょうか。そんなふうに考える前に、私たちはどういう者だったのでしょ。私たちだってサウルと大して変わらないのではないか。他人の目の中のちりはよく見えます。しかし自分の目の中にある梁には気がつかない。それが私たちです。サウルに対して腹を立てられるのか。サウルは自分ではないと言えるのか。いや、サウルこそ私たちの姿そのものではないですか。

神はサウルをあわれんでくださっています。ダビデはサウルの友であるときえ言ってくださいています。

それと同じように、私たちには友が与えられている。イエス・キリストです。ダビデもしたように、主は私たちのために誓ってくださいます。「あなたの名を根絶やしになど絶対にしない。」

サムエル記には、あまりにもひどいサウルの姿が描かれていました。実はそこに、神がどれほどあわれみ深いかたであるのか、私たちに知ってもらいたい、そんな願いを込めて、私たちを励ますために書かれていたのです。

主の御名をあがめます。